

《一》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題については、句読点も一字と数えます。)

24日、桜島が噴火し、噴火警戒レベルは最高の5(避難)に引き上げられた。この評価方法が導入された2007年以来、全国で2例目となる。桜島は15年8月にレベル4(避難準備)が発令されたことがあるが、今回はそれを上回った。

近年で最も大きな噴火は、約60人の犠牲者を出した1914年1月の大正噴火である。日本においては20世紀最大の火山噴火であり、大きな地震も伴ったことで被害が①カクダイした。また、この噴火で桜島は大隅半島と地続きになったのである。

今回の噴火については、27日夜にレベルが3(入山規制)に引き下げられたが、しばらくは注意したい。

さて、大正噴火で被災した地域では、後世に教訓を伝えるための石碑が多数建立された。その一つ、東桜島小学校の敷地内に立つ碑文には、「住民は理論を信頼せず、異変を感じた時には避難の用意をすることが最も肝要だ」という趣旨のことが書かれている。A どういう背景で、このような文面になったのだろうか。

桜島は江戸時代の18世紀後半にも大きな噴火を起こしていて、予兆のことは民間伝承として知られていたようだ。実際、大正噴火が始まる数日前から桜島では、地面が熱くなったり、地震が起きたりしていた。そのため、住民は各々の判断で島を船で脱出し始めたのである。その数は最終的に2万人を超えたという。

一方、東桜島村(当時)役場の川上福次郎村長たちも不安を感じていた。そこで、その前年に島に開通した文明の②リキ「電話」を使い、測候所(現在の鹿児島地方気象台)に何度も連絡をとった。すると測候所側はその都度「桜島は噴火しない」と回答した。村長らは安心し、自主的に避難をする村民を引き留めようとさえしたという。村長らはいわば村の「知識 ③カイキユウ」に属し、科学への信頼が厚かったのだろう。

その結果、逃げ遅れたのは村長たちだった。すでに船は一隻もなく、村長らは仕方なく海に飛び込み、帆柱などを抱え泳いで対岸に渡ろうとした。だが冬の海は冷たく、村の収入役や書記が途中で命を落とした。

噴火の直後から、測候所は世間に激しく非難された。これに対し、自分たちの任務は気象観測であり、火山は業務外であるとか、そもそも噴火の予知は技術的に無理であった、などと反論している。これを④シジする東京の専門家なども現れた。

とはいえ、もし業務外というのならば、問い合わせには「B」と答えるべきだっただろう。

一方、辛うじて生き残った川上村長は、自分が測候所の判断を信じたことで犠牲者が出たことに責任を感じ、その事実を碑文に残したいと考えた。だが、それを果たす前に村長は亡くなり、後継の野添八百蔵村長が噴火の10年後に先ほどの碑文を建立した。その「理論を信頼せず」の言葉から、「科学不信の碑文」と呼ばれることもあるが、当初は「測候所を信頼せず」とする予定だったらしい。

この話は、C 現代のリスクマネジメントの抱える問題とも、地続きであるといえるだろう。

まず、そもそも現在でも噴火の予知は非常に難しい。住民の適切な避難に成功した、2000年の北海道有珠山の噴火のケースは、例外的と言うべきだろう。有珠山の場合は毎回、有感地震の直後に噴火し、また周期が短く、かなり正確に繰り返すといった、良い条件があった。

しかし、15年の桜島におけるレベル4発令の際は、直接の噴火は起きていない。このような、前兆がありながら噴火が起きないケースは、決してまれではない。

一方、63人もの死者・行方不明者を出した戦後最悪の火山災害、14年の御嶽山の噴火では、前兆現象は必ずしも明確ではなかった。

御嶽山は07年3月にもごく小規模の噴火をしているが、その時は4カ月前から山体膨張や火山性地震など、色々な予兆が把握されている。だが14年の噴火では、その2週間前に火山性地震が観測されたものの、ほどなく収まっていた。

ただし、膨張を示すデータが2日前に見られるなど、予兆と考えられる現象も観測されている。

今月13日、御嶽山噴火の⑤イゾクらが国と長野県に損害賠償を求めた裁判の判決が、長野地裁松本支部であった。前兆現象とみられるデータの検討を尽くさないで、噴火警戒レベルを1に据え置いた気象庁の判断は違法であると、裁判所は認めた。しかし、レベルを引き上げていても被害を防げたとはいえないとして原告の請求については棄却している。

御嶽山噴火は、大正桜島噴火のちょうど100年後に起きた事件だが、D という点で、両者は共通する。では、このような科学的不確実性の高いリスク課題に、行政や専門家はどう向きあうべきなのか。

たとえばもし、警告を出したのに「空振り」が続けば、予報への信頼が低下するだろう。E 「オオカミ少年」扱いになつてしまふ。一方で市民を守ることは、当然、行政の役目である。命はかけがえのないものだ。

私はやはり、できる限り科学的な対応を重ね、しかし最後の不確実な部分については「一般の人々にとって、後悔の残らない道」を選択すべきだと考える。

そして私たちの側も、できれば「空振り」を責めないようにしたい。行政や専門家を萎縮させず、また妄信せず、適切に活用していくことが、安全で民主的な社会を形作るための、前提条件なのである。

(注) リスクマネジメント……危機管理

(神里達博「月刊安心新聞プラス」朝日新聞 2022・7・29)

問一 次のア～オについて、本文の内容と合致しているものには○を、合致しないものには×を、それぞれ解答欄に書きなさい。

ア 桜島の噴火警戒レベルが最高の5（避難）に引き上げられたのは2回目である。

イ 2000年の北海道有珠山の噴火の場合、例外的に予知ができ、住民の避難に成功した。

ウ 15年の桜島の噴火警戒レベル4発令の際は、前兆がありながら噴火は小規模であった。

エ 14年の御嶽山の噴火では、山体膨張を示すデータが見られたが、噴火警戒レベルを変えなかった。

オ 07年の御嶽山では山体膨張や火山性地震など色々な予兆があったが、噴火はしなかった。

問二 傍線部A「どのような背景で、このような文面になったのだろうか」とあるが、その「背景」となった出来事を百字以内でまとめなさい。

問三 空欄Bに入れるのに最も適切な言葉を次の中から選び、符号を書きなさい。

ア 桜島は噴火する

イ 今すぐ避難せよ

ウ 検討中である

エ 善処します

オ 分からない

問四 傍線部C「現代のリスクマネジメントの抱える問題」に対してどうするべきだと筆者は言っていますか。七十五字以内で説明しなさい。

問五 空欄Dに入れるのに最も適切なものを次の中から選び、符号を書きなさい。

ア 問い合わせに対して、当局は噴火しないと回答した

イ 当局が火山性地震を観測したが、ほどなく収まった

ウ 予兆現象があったのに、当局がそれを生かせなかった

エ 自主的に避難する人々を、当局が引き留めようとした

オ 当局の判断は違法であると、地方裁判所が認めた

問六 傍線部E『オオカミ少年』扱いになつてしまう」とはどういうことですか。本文に即して四十字以内で説明しなさい。

問七 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

〈四十五点〉

《二》次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問題については、句読点も一字と数えます。)

ずっと、劣等生だった。

このことは、ことあるごとに話し、あるいは書いてきたので、ご存じの方も多いと思う。

まず、幼稚園には、ほとんど行っていない。

正確にいうと、一日で行くのを止めた。

登園した最初の日、私を含む子どもたちは、皆で切り紙をさせられた。鉄で紙を切り、広げると何かの模様になるという、あれである。私には、初めての体験だった。紙は手で、みるみるうちにボロボロになった。

それを見た隣の少女が、ひと言、私にこう言った。

「あんた、バカね」

その場で、席を立った。

「女子どもにバカと言われて、平気である男がいるか」

父の言葉を思い出した私は、それを実践したのだ。それから、近所の悪ガキたちと野っ原を駆け回って遊んだり、好きなことだけをして過ごした。父も母も、そんな私の行状を、とくに咎めだてたりはしなかった。

① そんな前歴があったから、小学校への通学も危ういものだった。

二日目から、家は出たものの、授業が始まる時刻になつても学校に辿り着かない。家の者たちが捜しに行くと、通学路の途中にある鍛冶屋の前で、鍛冶屋の親父の仕事の手元を飽かず眺めていたという。家の普請中は、やはり大工の手元に夢中になっていた。

それが私、西山忠来という少年だった。

そんな調子であつたから、一学期、最初の学期末にもらつた通信簿の評定は、はたしてオール1であつた。

「タダキ君は、学校というものが何なのか、まったく理解できていません」「毎日来るようにはなりましたが、くれぐれもご家庭でよくよくご指導ください」と、添え書きがしてあつた。

さすがに、大人たちも怒り出した。

「おまえ、何考えてるんだ」

「義務教育なのよ」

「こんなふうでは、とてもまともな社会人にはなれません」

しかし私自身は、ガミガミ叱られたところで「何を言ってるんだろう」くらいにしか思っていなかった。

「タダキ君、勉強してる？」

母が、ことあるごとに私に訊く。

「うーん」と、私は答え、一応、考えるふりをする。

そのうち、いつもの面々がやってくる。

「タダキくん、あーそーぼっ！」

途端、「はあーい！」と飛び出していく。

オール１も、むべなるかな、である。

そこから私を擲い上げてくれたのが、当時の担任教師の高木幸忠先生であった。

普段は、鬼のような先生であった。うるさくしていると、チョークを投げる。反抗すると、出席簿で頭を殴る。ヤンチャ坊主の私が目つけられるのは当然で、最初に座っていた窓際の席から教壇の真ん前に移動させられ、授業中を通して監視される憂き目にも遭った。

そんな典型的な鬼教師ではあったが、実は絵の好きな、芸術家肌の一面があった。

「スケッチに行こう」

夏休みが終わったある日、高木先生は私にそう言った。

私だけではなかった。もうひとり、クラスメートのフジワラ君にも、声かけられていた。

指定されたのは、日曜日であった。絵は好きだった。しかし、なぜ休みの日にわざわざ、クラスの中で私たちふたりだけを連れ出そうとしたのか、そのときは、まったくわからなかった。

わからないまま、誘われたことを、私は母に告げた。

約束の日曜日がきた。

朝、私は母に連れられて、駅へ赴いた。駅には、高木先生と、フジワラ君が待っていた。

母から私を引き取ると、いつもは恐ろしい高木先生が「大丈夫。大丈夫ですよ」と言って、笑顔を見せた。

よろしくお願いします、と母は深々と頭を下げた。その瞬間、母の眼から、パタパタッと、大粒の涙がこぼれ落ちたのが見えた。私は、びっくりして立ちすくんだ。そして、こう思った。

もしかして、俺は棄てられるのか？

フジワラ君は、母子家庭の少年だった。父親はいるが、家にはいない。噂では、人を殺して刑務所に入っているという話だった。おとなしい少年で、絵がともうまかった。

対して、オール１の劣等生の私である。町内でも目立つ一家の、その特殊な事情も、もちろん先生はわかっている。

フジワラ君と一緒に

私にこう聞かされたときから、^②母はすべてを悟っていたのだろう。

プラットホームで母と別れ、私は先生とフジワラ君と一緒に、列車に乗った。

人前で涙を見せることなどなかった母は、先生が自分の息子を思いやり、はじめてまともに扱ってくれたことに、思わず感極まったのだろう。

列車が動き出した。母は、まだ泣いていた。

行き先は、下関だった。海岸べりの丘の上、そこにあったテレビ塔の足元に陣取ったフジワラ君と私は、スケッチブックを広げ、絵を描き始めた。

丘の上からは、関門海峡が見渡せた。フジワラ君は、その風景を丁寧に描いていた。私は、なぜか海峡には目もくれず、蜘蛛の巣のように張ったテレビ塔を真下から見上げ、その向こうに見える空とともに描いた。

何を描いているんだ、とスケッチブックを覗き込んだ高木先生は、「へえ、面白い構図だな」と言い、フジワラ君を呼び寄せた。

フジワラ君も「うまいね」と言った。

フジワラ君は海を、私は空を、そうして一日中描き続けた。

高木先生は、私たちの傍で、それを見守っていた。

面白いな。うまいね。自分のすることを他人から褒められたのは、人生で、このときがはじめてだった。

この日描いた空の絵は、のちに市の美術展に出品され、私は銀賞を受けた。^③市内のデパートに展示されたその絵を、私は母たちと観に行き、その前で誇らしげに写真まで撮った。

このこともあって、図画工作の成績は、次の学期には1から3に上がり、私はオール１の不名誉から、何とか脱することができた。

D 弾みがついて絵に目覚めた私は、それから一心不乱に描き始め、図画工作の成績は、最終的に最高の5にまで上り詰めたが、そのせいでのちに思いもかけない弊害が出ることになる。だが、それはまた別の話である。

要するに、高木先生は、フジワラ君と私を最良としたのである。

それぞれの複雑な事情を抱えた少年たちに、絵を描く楽しみを教えることが、生きていく上ですがになるかもしれないとでも考えたのであろう。

昨今の平等主義からすると、特別扱いは憎むべきものかもしれない。しかし、この頃は、こういう思いやりが生きていた。いい時代だった、ということなのだろう。

フジワラ君とはその後、クラスが分かれ、親しく接する機会はなかった。彼が絵を描き続けたか、そして、どんな人生を送ったかは、わからない。

その日のことを、私はのちに、自伝的小説の一場面に書いた。たまたまそれを読んだ高木先生の娘さんが、「これ、お父さんのことじゃないの」と先生に告げた。後日、高木先生から私の元へ、一通の手紙が届いた。

あのニシヤマ君が、たいへんな出世をなさつて。

手紙には、そんなふうに書かれていた。

④ それは間違いなくあなたのおかげですよ、と、私は胸の内つぶやいた。

(伊集院静『タダキ君、勉強してる?』より)

問一 波線部A～Dの語句の意味として最も適切なものを、それぞれ後の選択肢から選び、符号を書きなさい。

A 「咎めだて」

ア 必要以上に強く非難し
イ 疑い深く問いただし
ウ 念入りに調べて回り
エ 度を越して心を痛め
オ 指導をしすぎて悪化させ

B 「普請」

ア 破壊
イ 申請
ウ 査定
エ 巡回
オ 工事

C 「むべなるかな」

ア あんまりなことかなあ
イ もつともなことだなあ
ウ どうでもいいのかなあ
エ やるせないことだよ
オ どうしようもないのか

D 「弾みがついて」

ア やる気に水を差されて
イ だんだん楽しくなつて
ウ 負けん気に火がついて
エ より一層勢いがついて
オ 急なことに驚いて

問二 傍線部①「そんな前歴」とはどのようなものか、説明しなさい。

問三 傍線部②「母はすべてを悟っていたのだろう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中

から選び、符号を書きなさい。

ア ガミガミ叱つても何も変わらない「私」をいったん親と引き離してみるのが良いと高木先生は考えていたが、下関までわざわざ絵を描きに連れていくと聞いた母は高木先生の「私」をなんとかしてやろうという強い情熱を感じ、この先生に任せるしかないのだということに気がついたのだろうということ。

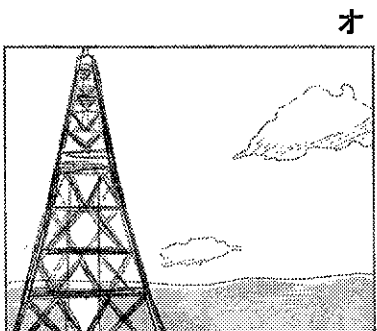
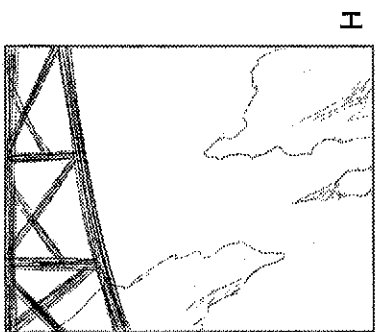
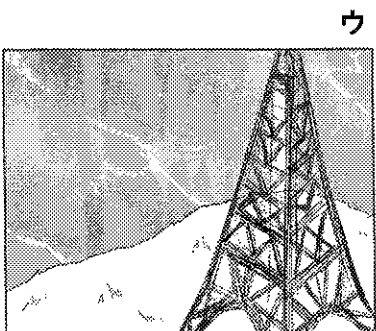
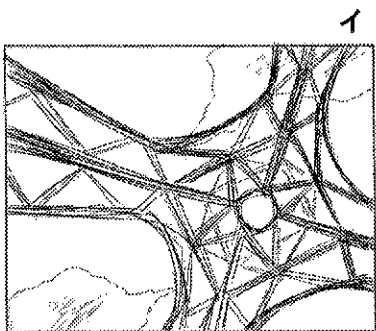
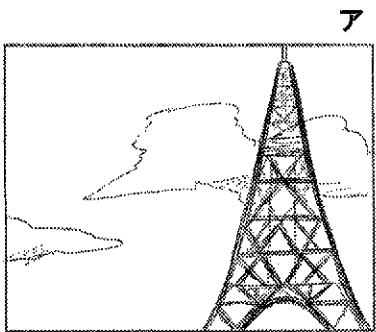
イ いつもは恐ろしい高木先生が優しい笑顔を見せてわざわざ日曜日に「私」を引き取り、絵を描きに連れ出してくれたため、母は何も分かっていない「私」をなんとか救おうとする高木先生が、少年たちの複雑な事情に配慮しつつ指導に当たつてくれていることに気がついたのだろうということ。

ウ フジワラ君は父親が人殺しだと噂されていたが、ヤンチャな「私」を持て余していた母は、そんなフジワラ君と一緒に「私」が高木先生に連れられてスケッチに行くことになったと聞いたことで、先生が複雑な事情を抱えた少年たちと向き合

い、なんとかしようとしてくれてることに気がついたのだろうということ。
エ 母は大人の言うことを聞かない「私」に絶望し、ついに棄てられるのかと恐れおののく「私」の姿を見てあきれ果ていたが、高木先生がフジワラ君とともに「私」を列車で連れて行くことを聞き、特殊な事情を抱えたフジワラ君とであれば「私」が評価されることもある可能性に気がついたのだろうということ。

オ 学校というものを理解できない「私」の行状に手を焼いていた母は、高木先生が「私」を絵のとてもうまいフジワラ君とともに連れ出すということを聞いて、フジワラ君との交流をきっかけに、「私」の持つ絵の才能が引き出され、学校にも適応できるようになるかもしれないと気がついたのだろうということ。

問四 傍線部③「市内のデパートに展示されたその絵」とあるが、次の中から「その絵」を再現したものとして最も適切なものを選び、番号を書きなさい。



問五 傍線部④「それは間違いなくあなたのおかげですよ」とあるが、ここでの「私」の心情を百字以内で説明しなさい。

〈四十点〉

《三》 次の①～⑮の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 帝国が武力でハントを広げようとした。
- ② 農村が国土の大半を占めるため、その国は大陸のコクソウ地帯と呼ばれている。
- ③ 世界情勢はコンメイを極めた。
- ④ コロナ禍により、様々なシユクサイが中止になった。
- ⑤ 体育大会がジュンエンになった。
- ⑥ 楽しみにしていたモーツアルトのカゲキを三年ぶりに鑑賞することができた。
- ⑦ ある芸人は久々に、シユウジン環視の中で見事な技を披露することができた。
- ⑧ ユウビンの到着に時間がかかるようになった。
- ⑨ メディアではシタサキ三寸で耳目を集める者もいる。
- ⑩ 彼の発言はシヨウ末節にこだわったものばかりで、本質を理解しているとは言えない。
- ⑪ 彼は時代のチヨウリュウに乗ってもてはやされている。
- ⑫ トップに立つ人の朝令ボカイに振りまわされる。
- ⑬ カイトウ乱麻を断つ見事な課題解決はとても期待できない。
- ⑭ 組織の長として指導力をハツキすることが求められる。
- ⑮ キウ壮大な計画を立てて世の中を良くして欲しいものだ。

〈十五点〉

一	朝日新聞 2022年7月29日 神里達博 月刊安心新聞⁺
二	書名 タタキ君、勉強してる？ 著者名 伊集院 静 出版社名 集英社 発行年度 2022年4月 絵は本校教員による